

龍源寺の歴史について(九)

松原 泰道

先住祖来和尚が住職する前から、当寺には多大の借財がありました。和尚には、まづその返還が何よりの急務であったので、忠実にその事にあたりました。その傍ら寺の修復をしなければ成りません。随分と苦勞をしたことでありましよう。

寺院としての面目をとりもどすには十年を必要としたといわれます。それは現存の文書でもはつきりとわかることでもあります。

大正四年——大正天皇のご即位式を記念して、寺の表門が石門に改められました。それ迄の木造瓦ぶきの門は建立年代も不明で、大破していました。寺の修復に特に力を注がれた総代・中沢六之助氏の犠牲的努力の結晶として現在門が建立されました。

従来門は高さ七尺、間口十尺でありましたが、新門は高さ九尺、間口十二尺、一尺一寸角の石柱二本、九寸角の石柱一本、大土台と共に御影材が用いられました。その工事が堅牢であったことは八年後の関東大震災にも、いささかの狂いもなく今日まで及んでいることでもわかります。

この工事に中沢氏は石材と石工手間の一切を寄附されました。鉄扉は、檀信徒中から和田、河野、坂谷、小岸の諸氏と寺の附近に家屋を所有したり住居中の吉田、伊藤、松下、永田、田中、大塚、松本の諸氏から寄進されました。(門扉は太平洋戦争が始まると供出を命じられたので、前記寄進者の同意を得て供出しました。現在の門扉は、戦後、隣接の大塚鉄工所の一寄進です。)

表門は、こうして面目を改めましたが、本堂そのものも建立期がわからない程古いので修繕が加え

られれば加えられる程、損傷個所もふえてゆく始末に、ついに改築の議が持ち上りました。

大正八年の中頃から、総代会議が頻繁に開催され、頭梁の坂谷松次郎氏によって設計図が完成したので、その年の八月に勸募帳が作られました。募縁の趣旨は(原文漢文)

私(祖来和尚)が明治四十年に当寺住職の任命を受けてから苦心して寺塔を維持經營して来ましたが、推定百余年の小建造物であるので、修繕を幾度しても維持はなかなか困難です。近頃は雨漏りもしく柱もくさって手の施しようもありません。一時しのぎでは却っていけないので、ここに改築を決意しました(意訳)

と、あります。かくて本堂改築の実動にあつたのであります。